



ほしの 道子 さん (向上野)

豊かな自然環境や美しい風景が守られ、引き継がれていくことのすばらしさを感じました。

集落の自治会、子ども会、営農組合などで構成される組織で、農村環境を維持保全する制度「多面的機能支払交付金」を活用し、平成25年から活動を開始しました。主に、水路

## 西松原地区活動組織とは

今回、古田部さんにこの放流活動について取材しました。

6月中旬の夕方、西松原地区第二ノ池(通称・かに池)付近では、ホタルが飛び交う幻想的な風景が広がります。この風景は、平成27年2月から西松原地区活動組織(古田部光文代表)が西松原あけぼの子ども会と行ってきたホタルの幼虫を放つ活動によって支えられています。

暗闇に灯る美しい明かり

# ホタルが飛ぶ 水辺づくり



周辺の草刈りや、地域花壇の整備をしたり、子ども会で池の生態系観察会などを行ったりしています。

令和3年2月には、第13回茨城県美しい水土里づくり優良活動として県農林水産部長賞を受賞しました。

## 子どもたちにホタルが舞う 日本の原風景を届けたい

例年6月と8月に開催してきた池の生態系観察会を通じて、子どもたちにホタルを見せたいとの思いが生まれ、幼虫の放ちを始めたそうです。5月から10月に池周りの草を刈って清流が流れるように整備し、2月末から3月初旬に、奈良県の業者からホタルの幼虫と餌になるカワニナ(巻貝)を取り寄せ、池に放しています。

しかし、ただ放せばよい訳ではないようで、300匹程度放虫しても、成虫に育つのは半分以下。「どうしたらもっとたくさんのホタル

ルが観られるのか、試行錯誤の結果、現在はホタルの幼虫の天敵である蜘蛛の駆除をしたり、ドクダミを刈り取ったりと対策に力を入れています。6月になると、ホタルは飛び始めたかといってもたつてもいられず、毎日ホタルが飛んでいるかを確認しに行きます」と放流の難しさを古田部さんは話してくれました。

## コロナ禍での中止を乗り越えて

今年はコロナ禍のため、やむなく放虫は中止されました。これまで放虫してきたホタルが生き延びているか、今年は不安と期待の混じった観察の年を迎えます。

「放虫を含め、この3年間は中止した活動がたくさんありましたが、今、活動の歩みを止めてしまうと全て無に帰してしまいます。今後、コロナ感染防止の対策を取りながら、人と自然にやさしい環境づくりを目指して、活動を継続していきたいと思っています」という言葉に、継続の大切さと、絶やさないという強い決意を古田部さんから感じました。



源氏虫と平家虫を交互に放虫

## 取材を終えて

かに池では、この活動で管理が行き届くようになり、不法投棄の抑制に繋がっているそうです。

また、各種活動を通じて農家と、地域の小学生やその保護者が交流する機会が増えました。さらに、ホタルの幼虫放流会では、回を重ねるごとに上級生が下級生をリードするなど、参加する子どもたちにも成長がみられるそうです。

今回の取材では、ホタルの幼虫の放流を通して生まれた、たくさんの変化を知り、この活動の大切さにとっても心打たれました。今年、かに池にたくさんさんのホタルが舞うことを願っています。



かに池でホタルの幼虫を放流する様子(令和3年2月) 左手前から2番目:古田部代表